

史料紹介

外務省外交史料館所蔵「須磨弥吉郎関係文書」について

原 口 邦 紘

本稿は、平成十九年三月、ご遺族⁽¹⁾より外交史料館に寄贈を受けた須磨弥吉郎の旧蔵文書について、その概要を紹介するものである。この旧蔵文書はほぼ整理を終え、近く、須磨弥吉郎関係文書（以下、須磨文書）として閲覧室において利用に供される予定である。

一

須磨弥吉郎（明治二十五年九月秋田県南秋田郡土崎新城町出生）は、大正八年（一九一九）二月外務省に入省（同年七月中央大学法律学科卒業、十月高等試験外交科試験合格）した後、英國、ドイツ、本省欧亜局勤務を経て、昭和二年（一九二七）十月公使館二等書記官として中国（北平）に在勤。以後、五年一月広東領事（総領事代理）、七年七月上海公使館一等書記官（公使館情報部長）、八年十二月南京総領事（九年一月中華民国公使館一等書記官兼任）を歴任、十二年四月米国大使館参事官に転ずるまで中国在勤十一年の長きに及んだ。この間、

満州事変から日中戦争へと激変する中で、中國要路との複雑な折衝に

携わる一方で、精力的な情報収集活動は「情報の須磨」の異名をとつた。

米国では斎藤博大使を補佐して、全国を講演行脚して米国世論の啓発

に努めた。十四年十月外務省情報部長、内閣情報部委員。十五年十二月特命全権公使としてスペイン駐箚、英・米の動向把握に努め、日米開戦後はスペイン政府の協力を得て情報収集「東工作」を進めた。昭和二十年四月スペイン政府の対日断交後の公使館幽閉中に膨大な回想録を執筆（後述【二】回想録綴—スペイン時代—）。同年十二月GHQ指令によりA級戦犯に指定。二十一年三月帰国、四月退官、二十三年十二月公職追放、二十六年八月戦犯指定解除（この間、隠遁生活）。二十八年（一九五三）四月、重光葵（改進党總裁）に請われて秋田県から出馬当選、三十三年四月まで衆議院議員を二期務めた⁽²⁾。須磨弥吉郎は美術・演劇への造詣深く、中国やスペイン在勤中に収集した絵画類は須磨コレクションとして知られる⁽³⁾。昭和四十五年（一九七〇）四月没（享年七七歳）。

二

須磨文書は全て須磨弥吉郎が生前「梅花草堂」と名付けた南荻窪の旧宅に収蔵されていた、外交官時代の意見書・報告書等写や調書類、回想録、評論・随筆、紀行文等をはじめとして、その他、原稿・草稿類、

葉書・書簡類、新聞・雑誌切抜き帳、写真アルバム、著書・パンフレット等である。外交史料館ではこれらを、形態・種類・内容により【一】外交関係等級、【二】回想録級ースペイン時代ー、【三】写真アルバム、【四】評論・論考・記事類、【五】新聞記事、【六】書翰・葉書類、【七】英文書翰・葉書類、【八】雑一書類・原稿等ー、【九】須磨コレクション返還関係等（書簡・書類）、【十】長崎県立美術館旧寄託「須磨弥吉郎関連資料」（抄）に整理分類のうえ、「須磨弥吉郎関係文書目録」を作成した。本稿では、須磨文書の中核ともいえる【一】及び【二】について、本稿末に同目録に準じた件名目録を掲載した。分類毎に文書の概要・特徴等につき紹介する。

【一】外交関係等級

先ず【一】の外交関係等級は、大正十四年から昭和十五年までの、中国（北京、広東、上海、南京）、米国（ワシントン）在任中及び外務省情報部長時代の外交文書（調書、報告、意見書等）を含む評論・隨筆集であり、内容は政治、外交、文化、美術百般にわたる。手記（ペン、鉛筆、墨書）が多数を占めており、その大半が外務省・在外公館・公信案用箋に書かれている。数頁から数百頁に及ぶ長短二四〇点余の文書や草稿類が、全てボール紙でカバーされた簿冊三二冊に編綴されている。件名目録の整理番号I（1～35）は、原本簿冊に記入されている番号をそのまま採用した。番号II（67～100）も同じく原本に貼付されているラベルの番号である。須磨文書【一】【二】は、一時、昭和三十七年から昭和六十一年頃までの期間、防衛庁（現防衛省）

防衛研修所戦史室に寄託されていたことがある。その際の預かり書の「別紙須磨弥吉郎氏寄託史料目録 昭和三七・六・一七現在」（ガリ版刷五頁）を見るべく【一】が「一、回想録」（1～151）【一】が「一、外交関係文書等級」（1～35）として件名が簡略記載され、後者のうち6,7,11の三冊は「欠本」と記されている。もともとは存在していたとも考えられるが、件名はもとより詳細は不明である。ただし、Ⅱの通し番号67-100は、須磨文書の中の「著者目録」（分類【八】）の番号である⁽⁴⁾。以下、件名目録【一】に沿つて主な文書を見てみる。

（1）「余録」（評論・隨筆）

・「山人論集」（一）（11）（111）（件名目録【一】8,9,10以下同）は、扉に「昭和六年十一月以降 余録 昇龍山人」と記されている。広東総領事館（総領事代理）時代の「余録」を集めた評論・隨筆集であり、三冊に六一点を所収する（総頁数）一九〇四頁）。昇龍山人は須磨弥吉郎の雅号。陳友仁外交部長の訪日（昭和六年七月）までの情勢を記した「満蒙のための心」（8-2）や須磨・陳友仁会談に関する「今一息」（8-3）はじめ、「唐紹儀・松井会見記」（8-5）、上海事件を評した「焦慮」（8-20）や「上海事件は錯誤なり」（8-17）、「廣東の二年」（9-22）、「廣東派が踊る」（10-43）、「支那要人病（汪精衛の一面）」（10-46）など中国関係の記事が目を惹く。

・「山人雜記」（【一】25）には、排日移民問題に関する大正十四年稿の「米国問題」（25-6）から昭和十五年に著した「支那事變と外交」（25-1）まで一八点が収められている。

(2) 中国在勤時代（昭和二年～十二年）の外交関係文書
・「西南政局論集」([1]12)には、「広東税関差押問題経過」(12-(1))「粵漢沿線視察旅行報告書」(12-(1)-1)はじめ、「広東省土匪に関する考察」(12-(2))、「満州時局対策要綱（未定稿）」(12-(4))⁽⁵⁾など昭和六年十一月～七年六月に著された一一編の報告書写や調書類を所収する。

・「政論集」([1]14)は、一九三五年～六年の危機に際して対中国政策を論じた「対支静観主義放棄論」(14-(1))⁽⁶⁾はじめ、昭和八年二月十六日記「熱河問題対策要綱（未定稿）」(14-(2))⁽⁷⁾、昭和三年一月「滿蒙対策私論」(14-(11))⁽⁸⁾に加え、暗殺された唐有壬についての感概を綴った「終始一貫」(14-(4))や昭和十年十一月二十五日記「唐有壬の死」(14-(9),(10))⁽⁸⁾など、七点を所収する。

・「論稿集」([1]15)は、上海事件、塘沽停戦協定後の中国側の対日觀を綴った「支那の対日觀隨想」(15-(1))、昭和七年十月記「対支時局対策要綱」(15-(13))、昭和八年五月二十一日記「北支見聞録」(15-(10))⁽⁹⁾などの中関係論考の他、「四十歳漫録付・長男」(15-14)など自身や家族についての記事をふくめ一八点を所収する。

(3) 米国在勤時代（昭和十二年～十四年）の外交関係文書

・「在米雑考」([1]26)及び「日米関係の考察」([1]27)には合わせて二五点の文書が編綴されている。「日米関係の考察」所収文書のほとんどが日米通商航海条約廃棄通告問題に関する論考である。「須磨参事官との協議事項」(27-(14))は、条約廃棄通告後、須磨との会談における米国政界言論界外交官や官吏有力者の発言要旨をまとめた

もの、また、「日米関係の考察」(27-(1))と「日支事変」と米国一事実の検討」(27-(2))は米国から帰朝の船上で執筆、横浜帰着の前日（十四年九月十六日）に脱稿している。直接、廃棄通告を手交された体験を踏まえた論考である。

(4) 外務省情報部長時代（昭和十四年～十五年）

・「声明問題一六月一十九日対外放送問題経緯概要」([1]32)は昭和十五年に生じた有田八郎外相声明問題の顛末に関する手記の原本である⁽¹⁰⁾。

・「帝國の對外國策」([1]33)は、須磨が直接関与した中国在勤中の事件を踏まえた対中国政策や、米英ソ等欧米諸国に対する對外政策論である（昭和十五年八月一日稿）。

・「山人講演集」([1]11) ([1]34,35)は、昭和十四年十月～十五年長時代の講演録と放送原稿二六点を所収する⁽¹¹⁾。

・「國際政局」([1]11) ([1]34,35)は、昭和十四年十月～十五年九月の間の日本外交協会の講演録二十六件を集録したものであるが、須磨弥吉郎（外務省情報部長）の講演録は「日米関係の現状に就いて」の一件のみである。

[1] 回想録綴 一スペイン時代一

次に [1] の回想録綴は、ほとんどが昭和十五年十一月から二十一年までのスペイン公使時代に執筆された計一五一冊の回想録・隨筆等である⁽¹²⁾。全冊が一冊ずつ簡易製本されており、大多数が一件一冊になつていて、うち大半の一三五冊が一九四五年四月十一日スペイン政府

の対日断交通告後、翌年一月にバルセロナを離れるまでの間、日本公使館（兼公邸）に軟禁中に執筆されたものである。数冊を除いて全てペンによる走り書きの手記であり、その特異な書体故に判読は極めて困難である。須磨によれば、戦犯（死刑）を覚悟して「遺録」として

書いたという。⁽¹⁵⁾ 内容は、（1）外交論、（2）スペイン印象記や欧州各地への紀行文、（3）内外人との交遊録、（4）その他、戦犯に指名された胸中を吐露した告白録や家族・恩人・友人への想いを記した手記、そして、圧倒的多数を占めるのが（5）美術論で七一冊を数える。いわゆる須磨コレクションに関連する記事も多い。なお、「東工作」など情報活動について直接ふれたものは見当らない。主な文書を摘記する。

（1）外交論・国家論

「報国憂記」（件名目録【二】3～9以下同）は、日西断交後に日本の将来を憂えて一気に書き上げた「戦争の由来とその来るべき世界の動向」（続一刀魂）144）を論じたもの、「昇格問題」（16）は在スペイン日本公使館の大天使館昇格問題の経緯、「独蘇戦と帝国の将来」（47）及び「帝国の進路」（49）は三同盟についての意見、そして、「国交春秋」（50）はスペイン政府による対日断交の顛末論である。

（2）印象記・紀行文

「西国印象」（19）、「闘牛紀行」（27）、「西国風光余録」（118）、「闘牛国」（121）やマドリッド滞在五カ年の思い出を綴った「馬徳里夜話」（115）⁽¹⁷⁾は任国スペインの印象記、「モロッコ紀行」（12）や「アラゴ

ン紀行」（21）～「グラダルーペ」紀行（26）など一連の紀行文は、歐州各地への公務旅行の際のものと考えられるが、私的な紀行文の形式をとっている。

（3）交遊録

「塞翁ヶ馬」（15）は須磨のカウンターパートだったフランコ政権のスニエル外相との関係や思い出、「梅花草堂往来往来綺談」（30）は「在支十一年間」に出会った中国要路の諸人物像の回想、「塞翁ヶ馬（11）」（45）は重光葵駐イギリス大使との邂逅、「野人居」交談群像（11）（105）は犬養毅、平沼駿一郎、近衛文麿、湯浅倉平等との交遊、「震脩伝（中国群像）」（106）は吳震脩、張群、唐友壬など中国要人との往来、「兆銘記」（107）は汪兆銘との交遊が綴られている。

（4）心境や家族・恩人・知人への想い

「一刀魂」（122）及び「続一刀魂」（144）は家族への述懐であるが、後者には戦犯としての心境が吐露されている。また同手記によれば、「斯の心境」（92）、「落暉寒鶲」（93）、「眞の朝」（94）も、戦犯指名された「当初からの覚悟が染み出ている」という。昭和二十年大晦日に記された「昭和二十歳（五十五歳漫録）」（150）には、戦犯指名された前後の覚悟が、GHQ指令写を含めて綴られている。「清廉翁」（98）は祖父について、「放吟五歳」（117）は家郷、家族（子ども達）への想い、「加藤さん」（104）は須磨弥吉郎を物心両面で支援した恩人加藤助吉について綴つたもの。⁽¹⁸⁾「好漢は先んず」（42）は千葉ボル

トガル公使夫妻自殺事件に触れている。

(5) 美術論・蒐集美術品（須磨コレクション）

美術に関する手記七四冊のうち、四五冊が南荻窪の自宅「梅花草堂」等に残してきた中国美術コレクションの解説、評価、分類や中国画壇展望であり（31～39,46,51～84）、二六冊がスペイン絵画に関する美術論である（17,20,40,119,120,128～143,145～149）。前者の中の十点は『京都国立博物館学叢』に翻刻されている。⁽²⁾ その他、「連象記」（103）は蒐集美術品の戦時中の保管経緯について、「梅花草堂馬徳里集」（120）はスペイン美術の蒐集経緯について、「華府草堂集」（113）はワシントン時代の蒐集美術品についての著述である。須磨によれば中国時代十一年間の東洋美術品の収集数二一五〇〇点、スペイン時代五年間のスペイン美術品の収集数一、七〇〇点という。⁽²⁰⁾ 須磨文書の中には他に、スペイン・コレクション返還関係の書簡、目録、外務省とのやりとりを示す書類なども存在する（後述【九】）。須磨コレクションは、現在、中国美術品は京都国立博物館に、スペイン美術品は長崎県立美術館に収蔵されている。

なお、【二】回想録綴は、もともと一五一冊が存在していたと考えられるが⁽²¹⁾、原本六冊の所在が不明になつておらず、現存しているのは原本一四六冊及びコピー一冊である。⁽²²⁾

【三】写真アルバム

外交官時代の大型の写真アルバム三六冊、内訳は、中国時代のもの五冊（約三六〇枚）、ワシントン時代一冊（八四枚）、スペイン時代

二六冊（約二、四〇〇枚）、他四冊である。唐有壬、陳公博など中国政府要人との写真を含む中国時代のアルバムはじめ、スペイン時代の写真集には、信任状捧呈式の模様から、諸行事風景、公邸での展示会の模様、断交後の幽閉中の日常生活、回想録執筆中のスナップまで公私にわたる厖大な写真が収められている。その多彩な情景は、須磨の外交活動を知る上で、人間像をうかがう上でも、きわめて貴重な資料であり、特に須磨文書の中の【一】と【二】の文書群を補完する資料といえよう。

【四】評論・論考・記事類

須磨弥吉郎著による戦後発表された雑誌記事、新聞連載記事集やパンフレット等印刷物の資料群で一六九点がスクラップブック一一冊に収録されている。「須磨情報秘話」（『文藝春秋』昭和二十五年十二月号）など数点の他は、「改進、社左両党への公開状」（『経済新誌』昭和二十八年六月号）や「吉田首相は元首ではない」（『外交春秋』昭和二十九年六月号）等々、ほとんどが衆議院議員時代（昭和二十八～三十三年）のものである。

【五】新聞記事

テーマ別にスクラップブック二五冊に整理された新聞記事切抜集である。ワシントン時代の米紙等の須磨関係報道記事を集めた「華府時代1937～1940」一冊、スペイン時代の須磨関係記事を集めた「スペイン便り」二冊の他は全て戦後のもので、郷里の秋田県関係（昭和二十八～三十一年）や選挙関係（昭和二十六～三十三年）には須磨弥

吉郎関係記事が集録されている。他は、国政、外交、防衛、日ソ交渉、海外政治などテーマ別の記事切抜集である。

【六】書簡・葉書類

在米国大使館参事官時代（昭和十二～十四年）の須磨弥吉郎宛書簡・葉書二五通及び戦後の須磨宛一通と須磨書簡案一通である。須磨参事官宛の差出人名を列記すると、朴錫胤、岩永裕吉、岩井英一、平澤和重、前田多門、武田胤雄、日比俊吉、井出一六、西山、重光葵（駐英大使）、徳富猪一郎（徳富蘇峰）、平塚常次郎、加納久朗、柳瀬省吾、山内直元、佐々木駒之助、北田正元、横田実、等々である。ほとんどは便宜供与願や礼状などであるが、事務連絡的な仕事絡みのもの（平澤書簡）、モネ（Jean Monnet）情報（西山書簡）、須磨弥吉郎との緊密な関係を彷彿させる重光葵書簡など注目されよう。

【七】英文書翰・葉書類

Suma宛Clifford Browne書簡九二通及び他Suma宛書簡一二通、須磨手書き書簡案二通の計一〇六通の英文書簡である。Browne書簡のうち、五一通が須磨のロンドンにおける外交官補及び大使館三等書記官時代（一九二一年三月～一九二三年一月）の日付、四一通が在ドイツ大使館時代（一九二三年一月～一九二四年七月）の日付であり、内容は、須磨がロンドン時代出版した英文戯曲『After All』（アフター・オール）⁽²⁴⁾の執筆、出版に関するものが多い。

【八】雑一書類・原稿等

須磨弥吉郎筆の各種草稿や講演原稿、出版物の原稿、衆議院時代の

質問趣意書などの国会関係資料、劇脚本などや、公文書写（大正十五年四月二十六日「近東貿易促進会議議事録」）を含む雑多な資料四九点が分類整理されている。『スペイン芸術精神史』（みすず書房、昭和二十四年のスペイン語の翻訳原稿や未刊の「支那美術概論」原稿（一一〇枚）、大学ノートの「著書目録」や「須磨画帳目録」、須磨筆画二三五点の解説綴りも含まれる。

【九】須磨コレクション返還関係等（書簡・書類）

須磨弥吉郎が帰国に際してスペイン政府に寄託していたスペイン絵画の返還交渉に関する書簡や書類である。昭和二十七年九月九日付矢口麓スペイン大使の須磨宛書簡はじめ矢口大使とスペイン当局間の書簡や美術品リスト四点、須磨宛駐日スペイン大使館書簡（一九六二年一月～九月）六点、須磨弥吉郎宛外務省公文「須磨元駐スペイン公使の絵画返還について」など三点の計一三点である。須磨コレクション返還関係の外務省記録として、外交史料館に「美術工芸関係雑件」須磨コレクション返還交渉関係」（I1.7.1.2-1）が所蔵されており、マイクロフィルムで公開されている。

【十】長崎県立美術館旧寄託「須磨弥吉郎関連資料」（抄）

長崎県立美術館に寄託されていた須磨弥吉郎旧蔵文書⁽²⁵⁾の一部で、平成二十年六月、須磨家から外交史料館に追加寄贈された三〇点である。内訳はスペイン時代の写真アルバム五冊と回想録綴二冊、書簡（スペイン語）一五通、その他芸術関係資料、時局書要領（須磨弥吉郎訳）などである。

以上、須磨文書の概要を【一】と【二】を中心に紹介してきた。公文書としては、当然ながら、外交史料館所蔵の外務省記録の中に、外交官・外務官僚として立案に関わった公信・電信はじめ、意見書、調査・報告書類が多数存在し、事件・事項別に分類された記録ファイルに編綴されている。本稿の須磨文書の中にも公文書写（大多数が須磨弥吉郎起案）が見られるが、外務省記録との重複はほとんど見られないようである。須磨文書の中の回想、評論、隨筆には須磨弥吉郎が直接間接関わった外交活動に関連するものが多数見られる。したがって、須磨文書の史料的価値は極めて高いと考えられる。

須磨弥吉郎はスペインに残してきた手記（【二】）について、戦後の昭和三十一年、次のように述懐している。

「ぼくは、三十年もの間、外国を歩いた。その最後の任地マドリッドで、ひとたみにA級戦犯などにされた。場合によつては、首も飛ぶかもしけないということになつた。せつせと、書き残すべきことを綴つて、ものの一万数千枚ともなつた。そのまま没収されてしまふ、ヨーロッパの某地に埋めて來た。それが、このごろ、友人のなさけで、持ちかえられた。嬉しさに震える手をおさえながら、大づかみに一冊々々、つぎつぎと読んで行く。たまらなかつたのは、千枚にも上つている「モロッコ紀行」である。（須磨弥吉郎「旅と人生—生きていることの嬉しさを旅で知る—」^②）。

注

（1）須磨末千秋・元力ナダ大使（平成二十年八月逝去）

（2）須磨弥吉郎については、松本重治『上海時代上・中・下』（中公新書、昭和四九、五十年）、加藤陽子「須磨弥吉郎—広田外交の奥行き」『彷書月刊』（昭和六十三年四月号）、波多野澄雄「情報外交須磨弥吉郎—「天真爛漫な小兒」の如く」『外交フォーラム』（一九八八年十月号）、中見立夫「大橋忠一と須磨弥吉郎—異色外交官の戦前・戦中・戦後」『東アジア近代史 第十一号』（二〇〇八年三月）、須磨未千秋『私の見た母聞いた母』（個人出版、一九九一年）、須磨の諜報活動については、秦郁彦「失われた対米情報——「東」情報と密偵ベラスコ」『昭和史の謎を追う・上』（文藝春秋社、一九九三年）、ゲハルト・クレーブス、田嶋信雄・井出直樹訳「第二次世界大戦中の日本・スペイン関係と諜報活動」（一）（二）『成城法学』六三、六四（平成十二、十三年）、宮杉浩泰「駐スペイン公使須磨弥吉郎の情報活動とその影響」戦略研究学会編『戦略研究（7）特集・インテリジェンス』（二〇〇九年十二月）などがある。

（3）須磨コレクションに関しては、中国絵画分野で、西上実「須磨弥吉郎と中国近代絵画」『美術フォーラム』4（醍醐書房、二〇〇一年四月）及び「須磨ノート解題」（前掲「須磨ノート 中国近代絵画編（一）」）があり、スペイン絵画分野では、『長崎県立美術館開館記念展 よみがえる須磨コレクション—スペイン美術の500年』（長崎県立美術館、二〇〇五年）所収の、徳山光「須磨コレクションに

ついて」はじめ、大高保二郎「須磨コレクションの美術—過去、現在から未来へ—」、ベスス・グティエレス・ブロン「長崎県美術館の須磨コレクション」、森園敦編の「現在所在の確認ができる旧須磨コレクション」及び「須磨コレクションに関する新聞記事」など一連の論考がある。他に、須磨コレクションの真贋を論じた神吉敬三「須磨コレクションの大きいなる幻影」『芸術新潮』23-5（一九七一年五月号）がある。

- (4) 大学ノートの「著書目録」(分類【八】)には、著者番号N.O.1から112まで須磨弥吉郎の著書はじめ雑誌文献記事の件名が記載されており、67～100は、本稿件名目録の番号IIの通し番号67～100と一致する。因みに、1～66は、AFTER ALL (1923) や『戦後十年の国際政局』(大正十五年)から『外交秘録』(昭和二十五年再版)までの著書・記事の一覧、101～112は「須磨弥吉郎画集」(昭和三十六年)など昭和三七年までの一覧である。本稿件名目録【】番号IIの欠番88と89は、「著書目録」には88「大村徳太郎」、89「廣西遊記」と記載されている。いずれも須磨文書中には含まれておらず所在は不明である。
- (5) 須磨未千秋編『須磨弥吉郎外交秘録』(創元社、昭和六十三年)111111～111111四八頁に翻刻所収。
- (6) 『現代史資料7満州事変』(みすず書房)111111～111111一六一頁に翻刻所収。
- (7) 前掲同、四九一一四九三頁に翻刻所収。
- (8) 『現代史資料8日中戦争(1)』一〇九一一五頁に翻刻所収。

(9) 『現代史資料7満州事変』五六五一五七七頁に翻刻所収。

(10) 須磨弥吉郎『外交秘録』(一一九一一一〇、一二四頁)によれば、ハル国務長官より通告文を直接手交されたと述べているが、「報国憂記」(須磨未千秋編『須磨弥吉郎外交秘録』九九頁)ではセイヤー一次官補となっている。

(11) 前掲『須磨弥吉郎外交秘録』111111～111111三頁に翻刻所収。

(12) 汪精衛広東政府への武器調達問題、中国「法幣」制度問題、福岡・上海航空連絡問題、綏遠事件後の日中攻守同盟論など。

(13) 昭和十二年三月十五日工業俱楽部第三回定例茶話会に於ける講演「日支関係の現状及び将来」(講演集一(4))は、前掲『現代史資料8日中戦争』四〇四一四一六頁に翻刻所収。

(14) 【1】43「支那放浪詩」、44「華府詩情」及び48「第一輯 一 支那事変と米国、二 日米関係の考察」の二冊はスペイン以前の著述。うち48は、【1】27「日米関係之考察」所収文書と重複している。全冊がバルセロナ幽閉中に製本されている。

(15) 「その、いろ風の便りでは、A級戦犯はみな殺されるというから、これ今生の遺言でもと記憶をたどつて一七四冊一万二千頁にわたる遺録を書いた。」(須磨弥吉郎『とき一須磨日記』昭和三十九年)。「一七四冊二万二千頁」は須磨の記憶違いであろう。注21参照。

(16) 前掲『須磨弥吉郎外交秘録』三一一三一頁に翻刻所収。

(17) 前掲『長崎県立美術館開館記念展 よみがえる須磨コレクション』二八四一一八九頁に翻刻所収。

- (18) 加藤助吉については、件名目録【一】9「山人論集（11）」にも「加藤さん」（9-(24)）が所収されている。また、前掲須磨未千秋『私の見た母聞いた母』にも記事（10八一九頁）がある。
- (19) 「現代国画分野展望」（51）、「齊璜白石翁」（52）、「田石をぬぐる人々」（53）、「范父姚華」（55）の四点は『京都国立博物館学叢25』に翻刻、「国画超然派」（57）、「京滬洋画派」（58）、「羊城中間派」（59）の二点は『学叢26』に翻刻、「虚谷和尚」（54）、「蘇仁三」（56）、「草堂洋画」（84）の二点は『学叢27』に翻刻されている。
- (20) 「馬徳里夜話」（115）。前掲『長崎県立美術館開館記念展 よみがえる須磨コレクション』。
- (21) 昭和二十年十一月三十一日の大晦日に書いた「昭和二十歳（五十五歳漫録）」（【1】150）には、「この日までの七ヶ月間に百五十冊一万五千五百枚を書いた。」と記している。一五一冊目の「西国後記」（【1】151）は、「一五〇冊全ての回想記の後記（総括）」として書かれ、昭和十一年一月十九日に脱稿している。
- (22) 「虚谷和尚」（54）と「范父姚華」（55）はコピーが残っている。他の欠本は「東西ソラナ論」（40）、「男鹿島」（100）、「弥山記」（101）、「母校に」（102）。
- (23) クリフオード・ブラウンがいかなる人物か分明でないが、須磨宛書簡の多くに使われているレターヘッジに印刷されている
TRUSLOVE & HANSON Ltd.は、ロンドンの書籍商・出版業者である。

- (24) After Allについては、中見前掲「大橋忠」と須磨弥吉郎」、七三頁参照。
- (25) 長崎県立美術館には、スペイン時代の須磨弥吉郎コレクションに関する新聞記事、展覧会図録、出品目録、雑誌、書籍、書簡など約千件が寄託されている。
- (26) 回想録綴「馬徳里夜話」と「馬徳里集」は【一】グループへ、写真アルバム四冊は【三】のグループへ分類した。
- (27) 『隨筆 五月号』（昭和三十一年五月、産業経済新聞社）三八一三九頁。なお、「モロッコ紀行」は、『動向』8-9～8-12（昭和三十六年九月十二月、動向社）に翻刻されている。
- （『日本外交文書』編纂委員）

件名目録【一】外交関係等綴

I	II	簿冊件名	所収文書
1	67	便乗報告	練習艦隊便乗視察報告書(未定稿) 海軍省大正15年度練習艦隊(出雲、八雲)便乗記(大正15/6/30～昭和2/1/17)
2	68	航行夜話(二)	第2輯(14.新嘉坡～27.紅海)
3	69	航行夜話(一)	「大正15年7月22日記、練習艦隊便乗余録、第1輯(横須賀ヨリ新嘉坡マテ)」
4	70	航行夜話 手稿	航行夜話 手稿
5	71	八雲新聞	「八雲ニュース」(No.1-197), 「いづも」(No.18, 150-177) (大正15/6/30～昭和2/1/12)
8	72	山人論集(一) 昭6年11月～7年2月	(1)秋立つ頃、(2)満蒙のための心、(3)今一息、(4)歳首余感(為廣東新聞)、(5)唐紹儀・松井会見記、(6)前厄漫録、(7)除夜記、(8)元旦録(寺島某慘殺事件記)、(9)議政壇上への途、(10)国策、(11)その日(議会解散の日)、(12)日華親善の日、(13)責任観念、(14)石仏の心、(15)村井翁の「仰ぎ瞻る信仰生活」を読む、(16)偉大なる淡泊、(17)上海事件は錯誤なり、(18)自負心(坂井氏来翰に感あり)、(19)時局詩(東洋、満州問題、上海事変)、(20)焦慮(上海事件解決の第一歩) (1-529頁)
9	73	山人論集(二) 昭7年2月～5月	(21)受験前の次男坊、(22)廣東の二年、(23)頭禿げゆく、(24)加藤さん、(25)親の欲目、(26)暗殺の噂、(27)果たして神経衰弱か、(28)卒業生のない卒業式、(29)実力派と党部、(30)何處か眼れぬ夜は続く、(31)支那には規服を要す、(32)甘い言葉、(33)廣東の雨期、(34)感謝の心、(35)支那とは何ぞや(廣東日本人会及互聯会主催講演会演述原稿)、(36)天長の佳節に当りて、(37)シクラーメンの想出、(38)殿堂を繞る人々、(39)秋公園爆弾事件の吟味(530-1162頁)
10	74	山人論集(三) 昭7年5月～6月	(40)爆弾三勇士と空閑少佐、(41)故国よ、(42)彼女と自分、(43)廣東派が踊る、(44)木堂翁の死、(45)人間味、(46)支那要人病(汪精衛的一面)、(47)支那を愛する心、(48)彼女の手紙、(49)高、(50)あねいもと、(51)ヒトラー主義より故国の政変を想ふ、(52)新聞報事件、(53)日本海海戦記念日、(54)古龍硯記(後藤司令官海記)、(55)輝かしい努力(大阪商船碼頭竣工に際して)、(56)飛矢魂、(57)氣魄、(58)女、(59)國の背影、(60)警護、(61)弓(1163-2094頁)
12	75	西南政局論集	(1)廣東税關差押問題経過 (1)-1 粤漢沿線視察報告書(昭和5年12月) (2)廣東省土匪に関する考察(昭和6年3月) (3)両広共産運動(昭和5年9月稿) (3)-1 支那共産党ニ関スル考察－支那ハ赤化スヘキヤー(昭和5年9月稿) (4)満州時局対策要綱(未定稿) (4)-1 同上原稿(昭和6年11月21日稿) (5)両陳不和説ニ関スル内面的考察報告ノ件(昭和6年3月26日在廣東須磨総領事代理発外務大臣宛機密第472号)(写) (6)『廣東客家民族の研究』(昭和7年12月、外務省情報部) (7)海軍駐在武官設置方稟請ノ件(昭和7年5月24日在廣東須磨総領事代理発芳沢外務大臣宛機密公第613号)(写) (8)排日教育調査ニ関スル件(昭和7年2月29日在廣東須磨総領事代理発芳沢外務大臣宛機密公第269号)(写) (9)陳濟棠ヲ中心トシテ觀タル西南政局進達ノ件(昭和7年6月17日在廣東須磨総領事代理発斎藤外務大臣宛機密公第711号)(写) (10)「廣西省事情」進達ノ件(昭和6年11月10日在廣東須磨総領事代理発幣原外務大臣宛機密公第1606号)(写)
13	76	農民論	農民論
14	77	政論集	(1)対支靜観主義放棄論、(2)熱河問題対策要綱(未定稿)(昭8.2.16.記)、(2)-1 热河問題対策要綱(未定稿)、(3)外交の内政的基礎、(4)終始一貫(唐有壬のこと)、(5)日支関係調整、(6)外務省論(昭6.8.14) (7)当り前のこと(昭11.5.6.)、(8)書画雑録、(9)唐有壬の死(昭10.12.25.)、(10)唐有壬の死(原稿)、(11)満蒙対策私論(昭3.1.)、(12)労農露國ト外蒙古トノ関係(大14.欧米局第一課)、(13)支那政況概観(昭和2年10月27日調、亞細亜局第一課)、(13)-1 支那政況概観(昭和2年9月21日調、亞細亜局第一課)、(14)支那政況概観(昭和2年10月5日調、亞細亜局第一課)、(15)ソヴィエト連邦と隣接亞細亜諸国との関係(昭和2年3月調、欧米局第一課)、(16)ソヴィエト連邦の対外関係(昭和2年3月調、欧米局第一課)
15	78	論稿集	(1)支那の対日觀隨想、(2)山田純三郎翁の一面、(3)政局隨感、(4)鶩見さんと絵、(5)国民政府時代の廣東の雰囲気、(6)停戦協定前後、(7)福建政府に対する情勢判断(未定稿)、(8)人民国民政府と帝国の対策(昭和8年7月30日稿)、(9)日支時局に感あり(昭和8年7月30日稿)、(10)北支見聞録(昭8.5.21.)、

			(11)米支関係秘史（昭7.10.18.）、(12)帰朝日誌観（昭7.8.29.）、(13)対支時局対策要綱（昭7.10.）、(14)四〇歳漫録、付・長男（昭5.12.31.）、(15)時局雑観（昭8.7.7.）、(16)帰朝の妻に託して二子に送る（昭6.3.14.）、(17)病後初めて筆を呵して愛妻に呈するの書（昭2.1.4.）、(18)厄年（昭8.7.12.）
16	79	ロカルノ以後の欧州	ロカルノ以後の欧州
17	80	英國政治秘史	英國政治秘史
18	81	英國政治史（航行夜話）	英國政治史（航行夜話）
19	82	欧州外交史論	欧州外交史論
20	83	日俄戦争史料	「第一次日俄戦争史料（一）～（百）」（喻血論輯）
21	84	華南之旅	(1)廣西雜記 (2)華南の旅
22	85	華語修成	華語修成
23	86	劇集	須磨弥吉郎作の戯曲テキスト
24	87	画展記	朝報、新民報、中央日報、中国日報、（民国20-25年）
25	90	山人雜記	(1)支那事変と外交（昭15.7.）、(2)外国人の性格、慣習及び社会的儀礼（大正14年稿）、(3)政治序論、(4)戦時債務問題、(5)ゼネバ平和議定書の新機軸、(6)米国問題（大正14年）、(7)雜記、(8)小西千比古著「南洋群島の重要性」（昭和10.12.）、(9)支那の魂胆、(10)ハル声明問題、(11)夏宵（昭12.8.11.）、(12)憩ひ（昭12.8.11.）、(13)廣西省事情（昭和7.5.外務省通商局在広東須磨総領事代理視察報告書須磨弥吉郎）、(14)東亜を侵す者－央州日報寄稿記事切抜（昭和14.1.1.公使館一等書記官須磨弥吉郎）、(15)東洋人文化と日支問題－須磨書記官講話－（陸戦隊司令部昭和8.4.）、(16)支那の真相（昭和7.11.15.）、(17)米国問題雜記、(18)英國政治秘史
26	91	在米雜考	(1)ウエルズ特使の欧州行脚（情報部第三課昭和14.4.5.）、(2)松村君を憶ふ（昭和14.9.17 大洋丸にて）、(3)沿岸雜感、(4)米国の対外政策、(5)ハル平和声明の底意、(6)米国政界要人禄、(7)米国に於ける対日感情、(8)米国労働運動の近況（昭和12.7）
27	92	日米関係之考察	(1)日米関係の考察－日米通商航海条約廃棄問題－（昭和14.9.16.稿）、(2)日支事変と米国－事実の検討（昭和14.9.16.稿）、(3)英米関係概観と対英米施策試論、(4)条約廃棄問題会談要録、(5)日米懸案一覧（昭和14.9.25.米一）、(6)日米通商条約問題対策（昭和14.8.24.）、(7)対米政策（案）、(8)通商条約廃棄通告対策、(9)対支宣戰布告問題、(10)九国条約破毀問題、(11)日米通商条約問題対策（案）（昭和14.8.24.）、(12)大使館館務、(13)対米啓発問題、貿易省対策、他（米一）、(14)須磨參事官との協議要項（昭和14.9.25.）、(15)条約廃棄會議要録（昭和14.9.25.米一）、(16)日米通商条約問題対策（昭和14.8.24.在大使館）、(17)日米関係の考察（手記）（昭和14.9.16）
28	93	山人講演集（一）	(1)新支那政府の成立と第三国、(2)日米関係を中心とする世界情勢（昭和15.4.）、(3)日米問題の核心（昭和15.4.）、(4)最近の国際情勢に就いて（昭和15.2.）、(5)外交と思想戦（昭和15.2.）、(6)国際情勢と日本の立場、(7)支那事変と国際事情（昭和15.2.）、(8)最近の国際情勢を眺めて（昭和15.8.）、(9)列国の戦時経済生活を比較し我が国民の一層の緊張を要望す（昭和15.2.）、(10)時局と精神力 興亞奉公日に於ける外務大臣演説原稿（昭和15.5.）、(11)欧州戦局と帝国の立場（昭和15.5）
29	94	山人講演集（二）	(1)米国大使館參事官須磨弥吉郎『支那の再認識』（昭和12.4.）、(2)『移り行く支那と日支関係』（南京総領事須磨弥吉郎講述）（昭和12.2.）、(3)『外交戦に伴ふ思想戦』（昭和15.5.）、(4)『日支関係の現状及び将来須磨南京総領事の演説筆録』（昭和12.4.）、(5)『帝国外交の針路（須磨情報部長講演集）』（昭和15.7.）、(6)『西安事変後の支那一般情況』（昭和12.3.）、(7)『支那新政府成立と列国の動向』（昭和15.4.）、(8)『直面せる帝国外交の諸問題』（昭和15.8.）、(9)『米国の極東政策と日米関係』（昭和15.4）
30	95	山人講演集（三）	(1)国際政局展望（昭和15.11.）、(2)最近の国際情勢、(3)三国条約の反響とその意義（昭和15.10.）、(4)『日独伊三国条約の意義』（昭和15.10.）、(5)最近の国際情勢
31	96	山人講演集（四）	(1)日本の国際的地位（昭和15.1.）、(2)松村君ヲ憶フ（昭和15.2.）、(3)郷土に寄する言葉（昭和15.3.）、(4)日米関係に就いて（昭和14.12.）
32	97	声明問題	六月二十九日对外放送問題経緯概要 昭和15年有田八郎外相声明問題
33	98	帝国對外國策	帝国の對外國策 昭和15年8月1日
34	99	国際政局（一）	日本外交協會講演録12点（昭和14年10月～15年3月）
35	100	国際政局（二）	日本外交協會講演録14点（昭和15年4月～15年9月）

件名目録【二】回想録綴一スペイン時代

件名（作成年月日）		件名（作成年月日）	
1	五十歳漫録（昭和15年晦日）	48	一支那事変と米国（事実の検討）（昭和14.8.2.稿於華府）、二日米関係之考察（昭和14.9.16稿於大洋丸丸上）
2	思郷漫録（昭和20年6月）	49	帝国の進路（昭和16.7.10.稿）
3	報国憂記 総目次（昭和20年5月26日起筆）	50	国交春秋（昭和20.6.23.）
4	報国憂記 第一	51	現代国画分野展望「現代国画の分野と齊白石」（昭和20.8.9.）
5	報国憂記 第二	52	齊白石翁（昭和20.8.9.）
6	報国憂記 第三	53	白石を繞る人々（昭和20.8.8.）
7	報国憂記 第四	54	虚谷和尚（昭和20.8.10.）【写】
8	報国憂記 第五	55	茫父華（昭和20.8.27.）【写】
9	報国憂記 第六（昭和20年6月4日脱稿）	56	蘇仁山（昭和20.8.30.）
10	歐州旅情（昭和20年6月稿）	57	国画 超然派（昭和20.8.31.）（例言：昭和21.1.2.）
11	歐州戦塵（昭和16年4月）	58	京滬 洋画派（昭和20.9.2.）（再記：昭和21.1.3.）
12	モロッコ紀行（昭和17年8月稿）	59	羊城 中間派（昭和20.9.3.）（再記：昭和21.1.3.）
13	モロッコ小詩（昭和17年8月）（再記：21/1/7）	60	清朝(画)錄 第一 石濤至兩峰（昭和20.9.7.）
14	月と赤山（昭和16年12月5日）	61	清朝錄 第二 四王至漸江（昭和20.9.9.）
15	塞翁ヶ馬（昭和17年9月7日記）	62	清朝錄 第三 羊城至金陵（昭和20.9.9.）
16	昇格問題経緯（昭和18年5月）（後記：21/1/7）	63	書道（昭和20.9.12.）（例言：昭21.1.3.付記）
17	西国画各地展望（昭和17年1月）	64	古陶 金石 柴窯考（昭和20.9.17.）
18	盟友ドン・ルイス（昭和19年10月2日）	65	古陶 金石 康熙考（昭和20.9.17.）
19	西国印象（昭和16年5-7月）	66	古陶 金石 明赤絵（昭和20.9.18.）
20	西画の特質（昭和16年11月）（例言：21/1/7）	67	古陶 金石 石濤考（昭和20.9.19.）
21	アラゴン紀行（昭和20年6月26日）	68	古陶 金石 明龍泉（昭和20.9.20.）
22	ボルトガル紀行（昭和20年6月29日）	69	古陶 金石 宋龍泉（昭和20.9.21.）
23	レウス紀行（昭和20年6月8日稿）	70	古陶 金石 明陶考（昭和20.9.22.）
24	南方紀行（昭和20年6月13日）	71	古陶 金石 明青花（昭和20.9.23.）
25	北方紀行（昭和20年6月18日稿）	72	古陶 金石 宋瓷考（昭和20.9.22.）
26	グアダルーペ紀行（昭和20年6月20日稿）	73	古陶 金石 元瓷考（昭和20.9.23.）
27	闘牛紀行（昭和20年7月5日）（後記：21/1/7）	74	古陶 金石 清朝陶（昭和20.9.26.）
28	紀行拾遺（昭和20年7月3日）（後記：21/1/7）	75	古陶 金石 六朝仏（昭和20.9.24.）
29	紀行の落穂（昭和20年7月4日）（後記：21/1/7）	76	六朝三十五仏（昭和20.9.26.）
30	梅花草堂往来、往来綺談（昭和20.7.25）	77	唐朝仏（昭和20.9.26.）
31	梅花草堂往来、第一 支那美術品 其の一 手巻類（例言：昭21.1.7.）	78	古陶 金石 宋・元・明石仏考 附 唐壁画（昭和20.9.25.）
32	同上、同上 其の二 冊葉類、第一 古冊（例言：昭和21.1.8.）	79	古陶 金石 漢代考（昭和20.9.27.）
33	同上、同上 其の二 冊葉類、第二 国朝冊類、第三 集録、第四 現代冊類（例言：昭21.1.8.）	80	古陶 金石 唐前後（昭和20.9.28.）
34	指頭画 高其佩と前後（昭20.8.5）	81	古陶 金石 硯石考 附 筆墨文具（昭和20.9.30.）
35	梅花草堂、唐宋壁画（後記：昭21.1.8）	82	古陶 金石 文具考 図章（昭和20.9.30.）
36	梅花草堂、其の三 軸類、第一 古軸類 宋朝之部（後記：昭21.1.8）	83	玻璃油画（昭和20.10.3.）（後記：21/1/4）
37	梅花草堂、其の三 軸類、第一 古軸類 元朝之部（後記：昭21.1.8）	84	草堂洋画（昭和20.10.3.）
38	梅花草堂、其の三 軸類、第一 古軸類 明朝之部（後記：昭21.1.8）	85	草堂往来後記（昭和20.10.4.）
39	黄土論と支那美術論（昭20.6.11）	86	倫敦塔（昭和20.10.12.）（例言：21/1/4）
40	東西ソラナ論（昭20.7.10.）【欠本】	87	古城月影（昭和20.10.14.）（例言：21/1/4）
41	読書論（昭20年7月7日）（再後記：昭21.1.1）	88	丁香花（昭和20.10.11.）（例言：21/1/4）
42	好漢は先んず（昭20年8月2日）（例言・後記：昭21.1.8）	89	珠江錄（昭和20.10.19.）（例言：21/1/4）
43	支那放浪詩	90	金神父露（昭和20.10.18.）
44	華府詩情	91	鼓樓頌（昭和20.10.20.）（例言：21/1/4）
45	塞翁ヶ馬（二）（昭16.7.21）	92	斯の心境（昭20.9.28.）（まえことば：20/10/1）
46	博物館所陳 梅花草堂集「梅花草堂藏品博物館展観要録」	93	落暉寒鶲（昭和20.10.2.）（例言：21/1/4）
47	独蘇戦と帝国の対策（昭和16年6月29日記）	94	唄の朝（昭和20.10.7.）（例言：21/1/4）
		95	鳥海山（昭和20.10.8.）（例言：21/1/4）
		96	陽に待る（昭和20.10.8.）（例言：21/1/4）
		97	物の魂（昭和20.10.9.）（例言：21/1/4）
		98	清廉翁（昭和20.10.9.）（例言：21/1/5）

	件名（作成年月日）		件名（作成年月日）
99	夢み度し（昭和20.10.10）（例言：21/1/5）	125	輝国論 第三篇 神秘篇（昭和20.11.21）
100	男鹿島（昭和20.10.10）【欠本】	126	輝国論 第四篇 精華篇（昭和20.11.21）
101	弥山記（昭和20.10.11）【欠本】	127	輝国論 第五篇 平和篇（昭和20.11.22）
102	母校に（昭和20.10.11）【欠本】	128	富翁社人（一）（昭和20.11.24）
103	連象記（昭和20.10.15）（例言：21/1/5）	129	富翁社人（二）（昭和20.11.25）
104	加藤さん（昭20.10.15）（例言&後記:21.1.5）	130	虞禮古（昭和20.11.26）（後記：昭和21.1.7）
105	野人居 交談群像（一）（昭20.10.22）（例言&後記:21.1.5）	131	邊羅須家（昭和20.11.29）
106	震脩伝 中国群像（昭20.10.23）（例言&後記:21.1.5）	132	吳弥考（昭和20.11.30）（後記:昭和21.1.7.）
107	兆銘記（昭和20.10.21）（例言：21/1/5）	133	十七世紀七大家（昭和20.12.2）
108	未見記（昭20.10.17）（例言&後記:21.1.5）	134	伊国派（昭和20.12.4）
109	未聞記（昭20.10.26）（例言&後記:21.1.5）	135	仏国派（昭和20.12.4）
110	未言記（昭和20.10.25）（例言：21/1/5）	136	黄金時代十六家（昭和20.12.6）
111	馬稿日誌（昭和20.10.20.）（後記:昭21.1.5.）	137	普羅曼（昭和20.12.7）
112	新日本（昭和20.10.31）	138	浪漫派（昭和20.12.8）
113	華府草堂集（後記:昭和21.1.5.）	139	十九世紀（昭和20.12.9）
114	この歳の明治節（昭和20.10.3）（後記:昭和21.1.5）	140	婆恋紗（昭和20.12.11）
115	馬徳里夜話（昭和20.11.6）（後記:昭和21.1.5）	141	婆恋紗（二）素呂弥（昭和20.12.12）
116	めろんの頃（昭和20.11.7）	142	十九世紀風景画（昭和20.12.14）
117	放吟五歳（昭和20.11.8）	143	現代大観（昭和20.12.15）
118	西国風光余録（昭和20.11.10）	144	続一刀魂（昭和20.12.15）
119	絵の国（昭和20.11.11）	145	理想派（昭和20.12.26）
120	梅華草堂 馬徳里集（昭和20.11.12）	146	伝統派（昭和20.12.26）
121	闢牛国（昭和20.11.13）	147	新人觀（昭和20.12.28）
122	一刀魂（昭和20.11.15）	148	近代派（昭和20.12.29）
123	輝国論 第一篇 国は輝く（昭和20.11.19）（後記：昭和21.1.5）	149	自然派 附 装飾派（昭和20.12.31）
124	輝国論 第二篇 渾融篇（昭和20.11.20）（後記：昭和21.1.5）	150	昭和二十歳（五十五歳漫録）（昭和20.12.31）
		151	西国後記（昭和21.1.19）